

歴史とロマンの街、 函館野外劇



一九八八年フランスのル・ピティフ野外劇（今日では世界的にも有名）から火種をもらい、国の特別史跡五稜郭を舞台に公演を始めた函館市民創作野外劇の会の公演も、今年で十四回目を迎え、観客も延べ九回の公演で七千人を超えて、成功のうちに終了することができた。

毎回今後の対応策として新しい試みを重ねてきているが今回は観客へのアンケート調査を本格的に行った。その結果予想以上にポスターが観客の呼び込みに大きな役割を果たしていることが分かった。

今年のポスターは例年のものと異なり、特に次の三点を強調していた。

そのポイントは、第一に、当野外劇が国内最大規模の市民創作野外劇であること。第二に、内容が五稜郭を舞台にした九十分にわたる函館地方の歴史スペクトルであること。第三に、国土庁長官賞サントリー地域文化賞など数多くの受賞歴を紹介し、高レベルをP・Rしていたことである。

そこで当野外劇の生い立ち、主な内容、運営の現状についてこの三点のポイントから説明することで、大要をご理解していただければと思います。順次述べさせていただきます。

国内最大規模の市民創作劇

提唱者は、ル・ピティフ野外劇誕生の地フランス・バンディ県出身の神父フィリップ・グロード氏である。グロード神父は機会ある毎に説いた。五稜郭という素晴らしいロケーションを生かし、函館のユニークで豊富な歴史を野外劇として活用すべきだ。私の故郷では古城と前庭の池を生かして野外劇を始め、地域おこしにも大いに貢献している」と。

この発案・提唱に賛同した各界各層からなる幅広いロマンチストの函館市民がル・ピティフ野外劇を見学、翌年の一九八八年夏、延十回にわたる公演により第一回の野外劇がスタートした。

現在、毎回五〇〇人を超える市民がボランティアで出演している。

一方、財政面では、予算総額約四千万円のうち、補助金は市の四八〇万円が大部分で、トータル六百万円程度であり、主に入場券、前売り大人千八百円（販売と協賛広告などにより運営している）。

当函館野外劇は当然のことながら、出演参加する市民、制作スタッフ、事務局の総てがボランティアであり、この点が当函館野外劇の会の最大のセールス・ポイントと言つべきだろう。

函館地方の歴史、全国版に多数登場

市民公募によって出来上がった上映時間九十分の「五稜星よ永遠に」のシナリオは、函館山誕生から現代までの十七場面がナレーション一部にセリフのリードで展開される。当野外劇の強みはこの十七場面の大半が、函館地方の住民のみならず全国的に知られた歴史的事実であることだ。

例えば、室町時代アイヌの酋長コシヤメインが相次ぐ和人の横暴に対して立ち上がったコシヤメインの闘い、よもやと思われるであろう松前・千軒の地におけるキリシタン弾圧による「キリシタン一〇六名の殉教」、箱館を根拠地にエトロフ航路を開拓した、高田屋嘉兵衛の活躍、黒船来航による、箱館開港と国際化、「五稜郭を占拠した榎本武揚ひきいる旧幕府軍の、蝦夷共和国」の夢破れた、箱館戦争と土方歳三の死、明治・大正・昭和にかけ、北洋漁業基地として繁



高田屋嘉兵衛



コシヤマインのシーン

栄した函館」などの各シーンである。
 上演には、五稜郭の土手と土舞台、それに堀と堀につくられた特設舞台、堀をへだてた観客席(千七百席)・前の五か所を舞台として使用する。三頭の馬が各場面を盛り上げ、箱館戦争では当時の大砲二門が火を吹く。堀にはアイヌの丸木舟から屋形船まで、高田屋嘉兵衛の登場、北洋漁業などに大小十数隻の船が浮かび走るのである。
 いずれにしても、北海道開拓の歴史の中で数多くの重要な出来事の舞台となってきた函館。幾多の試練を乗り越え、今日の函館の土台をつくった先人達の心意気と旺盛な進取の精神。それは今も函館人の誇りであり、「礎」として受け継がれている。先人達の残した「叙事詩」を思い、明日への勇気を奮いおこす、ふるさと・函館賛歌」を、函館地方の民衆史の一つとして、市民とともに演じるのが、市民創作「函館野外劇」なのである。



箱館開港のシーン

在京マスコミ関係者も高い評価
 既に当野外劇は、北海道知事賞をはじめ、国土庁長官賞、サントリー地域文化賞を受賞しているほか、全国紙から二度の表彰も受けている。また、昨年、今年と地元観光協会が招へいした在京のマスコミ関係者からも高い評価を得た。東京レジャー・ジャーナリストグループの鈴木勲氏は、週刊新潮に「市民群集劇の圧巻」と題して当野外劇を称える紹介の一文を寄せておられる。
 今後の発展のために！
 当野外劇の会は、一昨年NPOの法人格を取得し、一層の自助努力に努めているものの、場所が特別史跡五稜郭であるため、観客席、水舞台はその都度設営しなければならず、ハード面の整備に収入の三分の二程度を要し、演出面のレベル・アップに投入する財源に乏しく、このことが最大のネックとなっている。
 明年は十五周年公演を迎えることから、演出面に新たな創意・工夫をと関係者一同意気込んでいる。また、唯一姉妹提携をいただいているル・ピティフ野外劇が二十五周年記念として来函され、さらに市政施行八十周年の年にもあたることから、この機会にと野外劇サミットの開催を計画しているが、これらの新たな経費捻出も課題である。
 それでも、当野外劇の会の会員は、歴史とロマンの街函館」ならではの、市民創作函館野外劇の旗を守り発展させるため、みんなで知恵を出し汗を流しているところである。

NPO市民創作「函館野外劇」の会

理事長代行 輪島幸雄



フィナーレ前のパレード



北洋のシーン



箱館戦争・当時の大砲